

## 【怪談概論】

担当：渋江照彦

### 【目次】

初めに：怪談とミステリ作家

- 1：現代における怪談の分類（萩原朔太郎「猫町」）
- 2：怪談における怪異発生論～境界型と浸食型～（吉田健一「百鬼の怪」）
- 3：怪談と語り（芥川龍之介「妙な話」）
- 4：東雅夫の「幻妖」と「幻視」～怪談における二つの軸～（中井英夫「地下街」）
- 5：怪談と艶（赤江瀑「春の寵児」）
- 6：怪談と逸脱（谷崎潤一郎「魔術師」）
- 7：怪談と写実（川端康成「片腕」）
- 8：怪談と不条理（渡辺温「父を失う話」）
- 9：怪談と童話（宮沢賢治「ひかりの素足」）
- 10：怪談と古典（世阿彌／野上豊一郎編訳「松風」）

終わりに：怪談の現在（中島敦「文字禍」）

参考文献1：作品・作品集

参考文献2：評論・その他

### 【初めに：怪談とミステリ作家】

今回の例会では、主に「怪談」と呼ばれる文芸ジャンル、その内でも現代の物では無く、大正及び昭和における作品を扱う事とする。これらの作品群を読む事によってDMS会員が少しでも「怪談」であるとか、「幻想小説」・「怪奇小説」といった物により積極的に触れるようになってくればこれ程嬉しい事は無い。また、これまでに既にその様なジャンルに深く触れている会員にも、概論としてより構造的に最新の理論も含めて、怪談という文芸ジャンルの複雑さ、奥深さを知って頂ければ幸いである。

ミステリ研究会において、怪談という在る意味で本筋とは少しばかりズレたジャンルを扱う事の意義に関しては、ミステリ作家が多く怪談的な作品を発表している事を根拠の一つとして挙げたい。例えば、平成二年から平成二十二年の間に沼田まほかる『アミダサマ』／有栖川有栖『赤い月、廃駅の上に』／恩田陸『私の家では何も起こらない』／京極夏彦『数えざる皿』『幽談』／宮部みゆき『おそろし 三島屋変調百物語』『あやし』／若竹七海『遺品』／綾辻行人『深泥丘奇談』／小野不由美『魔性の子』／赤川次郎『忘れな草』／皆川博子『妖櫻記』（年代は順不同）といった作品が発表されている。また、ここ数年においても有栖川有栖『幻坂』／小野不由美『残穢』・『鬼談百景』／篠田真由美『ホテル・メランコリア』といった作品が発表されており、決してミステリと怪談が隔絶した関係には無い事を物語っていると云えよう。むしろ、ミステリと怪談という物は隣接した分野として把握されるべき物であって、その点でDMSというミステリを専門的に読んでいる集団の中で怪談を論じる事の意義も大きいと言うべきであると考え。

今回例会で扱う書籍は東雅夫編『日本幻想文学大全 幻視の系譜』（筑摩書房 2013）であるが、この作品集を全て扱う訳では無く、数編をピックアップして適宜解説を行うという形をとって行く。その際にネタバレは必ず行うので、指定した作品は出来るだけ読んで来て頂ければ幸いである。

### 【1：現代における怪談の分類】

怪談を読むに際して、現代における怪談の分類について考えておく事は重要であろう。

現代において、怪談は大きく三つに分かれる。即ち、「怪談フィクション」・「怪談実話」・「怪談実話系」と呼ばれる物であり、この枠組みは現代だけでなく、それより前の作品群に関してもある程度適用可能な物である。

一つ目の「フィクション怪談」とは、黒史郎の『夜は一緒に散歩しよ』や長島楨子の『遊郭の話』といったあくまでもフィクションとしての怪談を描くパターンである。どちらかと言えば、幻想小説や怪奇小説、またミステリとの連絡が強い作品群であると言える。

それに対して二つ目が、「怪談実話」である。これは、最近になって勢いを見せて来た物であり、『怪談実話コンテスト傑作選』シリーズの書き手達、また『女達の怪談百物語』、『男達の怪談百物語』などの参加者など、その系譜を木原浩勝・中山市郎の『新耳袋』シリーズに求める事が出来る、まさにその怪異は現実に起こった物なのだというスタンスで描かれる作品群である。

そして、三つ目が、その中間に位置する「怪談実話系」という作品群である。所謂平成における怪談実話系の嚆矢と言えるのは、2007年の幽文学大賞短編賞を受賞した雀野日名子の『あちん』であると考えられる。この中で、雀野が行ったのは「福井県内に伝わっている都市伝説を元にした怪談」という要素、さらには其処に「それがあたかも実話、それもとりわけ自身の体験であるかの様にして語る物語」という要素の二つを混合させるという事であった。実際、雀野は自身が福井県在住である事をフルに活用してそのリアリティを『あちん』において出す事に成功している。この作品内で現実と虚構の間を自由自在に行き来する手法、文藝としての技巧をその点に尽くす手法というのをある意味で発見または再発見した雀野の業績は余りに大きいと言わざるをえない。この雀野のある意味で一つの問題提起が起爆剤となり、その後所謂『怪談実話系』シリーズという物が次々と刊行され、京極夏彦・加門七海・福沢徹三・平山夢明・岩井志摩子・山田野理夫・恒川光太郎といったそうそうたるメンバーがそのムーヴメントに名を連ねている、今や怪談を語る上では外す事の出来ない存在となっている。

#### 【作品解説1 荻原朔太郎「猫町」】

- ・怪談フィクションとして
  
- ・幻視のツールとしての方向音痴

### 【2：怪談における怪異発生論～境界型と浸食型～】

怪談とは言うまでも無く、「怪異が発生した過程」を述べた文芸であり、その怪異が恐怖の源泉となっている事は言うまでも無い。勿論、怪異自体よりもその背後にある人間の醜さの方に恐怖の重点が行く、という場合も十分考えられるが、それも結局の所その恐怖を発見するためには怪異の発生が前提として機能していなければならないだろう。

さて、怪談における怪異の発生には大きく分けて二つの形がある様である。その一つは、「境界型」であり、もう一つは「浸食型」である。

「境界型」とは、人がある一定の境界を犯したが為に、怪異と遭遇するというパターンの怪談である。例えば、山の中であるとか、川、森、便所や墓場、橋、トンネルの様な場

所は古来より現世と異界との境界として認識されて来た。その為、この様な境界において怪異が発生するというのが一つの形式ともなっており、現代の怪談においてもそれは十分に機能している。

これに対して「浸食型」とは、現実の生活内に怪異が浸食して来るパターンの怪談である。これは西洋の怪奇小説によく見られる形であり、現代日本の怪談においても多く用いられている。「浸食型」の特徴としては、怪異が起こる場が日常生活を送る場と同じである、という点が挙げられる。即ち、昼間には皆が普通に通る学校の廊下で夜中に怪異に出会う、といった場合や、昼間の人通りの多い道路で突然自分だけが怪異に出会うといった様な場合がこれに該当する。

#### 【作品解説 2 吉田健一「百鬼の会」】

- ・「浸食型」の一例として
- ・日常の段階的な非日常への変化という手法

#### 【3：怪談と語り】

怪談の特徴として、基本的に怪談が語りによって成立する文芸である、という点が挙げられる。これは怪談がそもそも落語の怪談噺や百物語によって語られる類の物であり、基本的に話芸に属する物である事からも理解出来る。これは同時に、語り手と聞き手が同じ場にいる事が前提として存在する物である事も示唆している。その為、怪談が文章として存在している場合でも、語り手と聞き手が同じ場を共有している様に感じさせる為に、様々な工夫がなされる事になる。その一つとして、「語り」という物の導入が考えられる。語り口調を使う事によって、読者は恰も怪異を体験した本人を目の前にして怪談を聞いている様な印象を受け、臨場感や恐怖が増す事になる訳である。

また「語り」とは、何も語り口調を使うだけでは無い。語り口調を使用しなくとも、語り独特の間の空け方、文章のリズムやテンポといった類の物によって語りの場を再現する事は可能である。

#### 【作品解説 3 芥川龍之介「妙な話」】

- ・怪談実話的なテイスト
- ・語りの入れ子構造

#### 【4：東雅夫の「幻妖」と「幻視」～怪談における二つの軸～】

東雅夫は、平成の世において怪談及び幻想・怪奇小説界を評論家及びアンソロジストとして、牽引している人物であるが、彼が最新の軸として日本の怪談界（所謂「文豪怪談」をその範囲としていると考えられる）において「幻妖」と「幻視」という二つの軸を設けた事は注目に値する。とは言え、これは東自身が「幻妖」という命名の由来は、硬質な幻想文学作品に主眼を置いた通史的アンソロジーの嚆矢たる澁澤龍彦編『幻妖 日本文学に

おける美と情念の流れ』に敬意を表したものであり、一方の「幻視」は、澁澤と共に戦後幻想文学の精神的支柱となった中井英夫が、ことのほか思い入れ深く用いていた言葉である」と「日本幻想文学大全」(全三巻)の各序文で述べている様に、その背景として澁澤龍彦及び中井英夫という二名の存在を指摘する事が出来る。

また、誤解を恐れずに言えば、「幻妖」とは海外の「怪奇」に相当し、「幻視」は海外の「幻想」に相当しているものの、これもまた先程の序文に述べられている通り、「それぞれ相通ずるところがあるはずだが、イコールではない」物である。同じ恐怖を扱うにしても、日本における怪談と海外における怪奇小説及び幻想小説では重なる部分が大いにあるとは言え、当然の事ながら完全にどちらもが一致するという訳でも無いのであり、その微妙な違いを味わう事も国内及び海外のこの様な作品群を楽しむ中での醍醐味の一つだと言えるだろう。

更に、もう一つ誤解を恐れずに述べるのであれば、「幻妖」とは、「怪異が主体である物語群」であるのに対して、「幻視」は「他の人と全く同じ光景を見ていながら、他の人とは全く違う世界を其処に視る人々の物語群」であると規定する事が出来るだろう。それに対して、「幻妖」とは、「怪異なる存在が自身の物語を語る物語」として位置付ける事が可能の様である。今回は取り扱っているのが『幻視者達の系譜』であるので、少しだけ「幻視」の方について解説を加えるならば、この「幻視者」とは物語の作中人物だけでなく、物語の作者自身も入っている事が重要であろう。普通の人は何とも思わない様な光景の中から幻想を引っ張り表現する事の出来る「幻視」という能力を持った者達の系譜、という意味合いがこの書物に込められているのではないかと担当者は思うのだが、如何だろうか。

#### [作品解説 4 中井英夫「地下街」]

・「死者の語り」を引き出す為の「幻視」

・「境界型」の一例として

#### 【5：怪談と艶】

怪談においては、しばしばエロティックな存在が描かれる事がある。此処では、その様な存在の事を「艶」という言葉で表現している。性的な存在がそれだけで彼岸の存在となり得るという事は、死と性とが近接的な存在と考えられている事と決して無関係では無いだろう。中国の志怪書においては、死霊と結婚する事で子孫をなした人の例が語られるし、西洋においても芥川龍之介が訳したゴーティエの『死霊の恋』(芥川訳では『クラリモンド』とされている)が性と死の関係で読み解ける作品であろう。また、日本においても所謂「牡丹灯籠」という物語が、死霊と交わる事によって遂には死んでしまう主人公の物語を描いている代表作と言えるし、平成の時代になっても岡部えつ『枯骨の恋』がこのテーマを描く事によって第3回『幽』怪談文学賞短編部門大賞を受賞している。性行というのは、基本的には隠れて行われる行為であるが、それが一端勢いを持てば、現実を侵食する「この世ならざるモノ」としての資格を容易に獲得するまでに至る事が、これらの作品を通して理解出来ると思われるのである。

#### [作品解説 5 赤江瀑「春の寵児」]

・「艶」の機能について

### 【6：怪談と逸脱】

怪談において重要な概念の一つに「逸脱」がある。この「逸脱」には先程挙げた性行の様に、普段は隠されて行われる物が表面に現れる場合、現実の世界では禁忌とされている行動（例えば近親相姦・死姦・犯罪的な行為）が異界という名の下に公然と行われる場合、そして怪異な状況に陥る（死者との交流・時間の異常な短縮・延長等）という現実からの逸脱を示す場合を考える事が出来るが、今回はこの内の一番目と二番目の場合について考えて行きたい。

彼岸という世界が現世とは違う規則で動いていると仮定される場合、人は彼岸の規則の中に現世では禁止されている、或いは隠されるべきだと考えられている行動を組み込んでいる場合が多い。例えば生島治朗「頭の中の昏い唄」においては、幼女を絞殺しその死体を愛撫する主人公の姿が描かれ、都筑道夫「闇の儀式」ではその名の通り黒魔術がテーマとなっている。先程挙げた岡部えつ「枯骨の恋」も死者との性行という観点で見れば逸脱であろう。勿論、この「逸脱」という概念は全ての怪談に当て嵌まる物では無い。例えば、イギリスを中心にして市民権を得ている所謂「優霊物語」（ジェントル・ゴースト・ストーリー）においては、死者との交流はあるものの、其処に禁忌を破るといった性格を見る事は出来ない。とは言え、逸脱的な行動が現世で禁忌と考えられている側面が存在している以上、その行動を起こす事自体が怪異な状況を現出させる装置の一つとして働きうるのだ、という事は注意しておきたい所である。

### 【作品解説6 谷崎潤一郎「魔術師」】

・「魔術師」における逸脱的要素

### 【7：怪談と写実】

怪談というのは、言うまでも無く「現実には存在しえない現象」を描く文芸であり、その様な描写を通して読者を恐怖や驚異、またその他の感情へと誘う文芸であるとする事が出来る。では、その様な状態へ読者を誘う為に必要な要素とは何かと言えば、言うまでも無く「現実には存在しえない現象」の写実性、本当らしさの保証である。

かつて、澁澤龍彦は「幻想の文学1985」という公募の選評において、「夢みみたいな雰囲気のものを書けば幻想になると信じこんでいるひが多いようだ。もっと幾何学的精神を！と私はいいたい。明確な線や輪郭で、細部をくつきりと描かなければ幻想にはならないのだということを知ってほしい」と指摘している。また、中井英夫も「短歌研究」に掲載された「白日夢」というコラムの中で、「幻を見る術は、いいかえれば現実のもうひとつの意味を知ることであり、ちゃちな空想や貧弱な比喻をもって浪漫主義の旗じるしに代える蛮勇ではない」と述べている。

以上の二人の言葉を含めて考えてみれば、怪異なる物、この世ならざる物の描写は「それが実際に存在している事を読者に確信させる」事、即ち「現実には存在しえない物が存在するのだと読者に確信させる」という一見相矛盾した状態へと読者を落とし込む事によって初めて生きて来るのである。幻想や怪異は、読者がそれを幻想や怪異だと認識しているが発動せず、読者がそれらを現に存在している物と誤認する事によって初めて発動する装

置なのである。

[作品解説7 川端康成「片腕」]

- ・「艶」と「写実」の関係性
- ・「腕」による「写実」の担保

【8：怪談と不条理】

怪談という物は、江戸時代からの伝統的な物には所謂因縁が纏わり付いている物が多い。言わば、「親の因果が子に報い」と言われるパターンを踏んでいる訳である。東海道四谷怪談のお岩、番町皿屋敷のお菊、羽生村の累は正しくこのパターンに当て嵌まる。Aという事件が起こったが為に怪異としてBという事象が起こる、というのはある意味で怪談の王道であり、陰惨な古城や幽霊屋敷を舞台としたゴシック・ロマンスの様な物ともその部分は相通じる物があると言える。

しかしながら、その一方でこの手の怪談とは逆に、全く何の因果関係も見出す事が出来ない状況で怪異が起こり、結局その怪異の出所も、出来た原因も判らずに物語が終る、というパターンの怪談もある。これは前提となる背景が全く判らない、または全く存在しない様な状態で怪異に見舞われる訳であり、「不条理な怪談」と類別する事が出来る。このパターンの怪談においては、怪異自体の恐ろしさもさる事ながら、「どうしてその様な怪異が起こったのか」という怪異の出来に関する合理的な由来（不合理な存在を描く怪談というジャンルにおいて非常に面白い矛盾と言えるかも知れない）が全く示されない事から来る、恐ろしさが追加される訳である。更に、この後者の恐ろしさが引いては、もしかすると自分の生活している何気ない日常空間が突如として崩れ、怪異が出現する恐ろしい「場」となりうるのだ、という事を読者に印象付ける事となり、その点からも読者の恐怖を引き立たせる役目を担う事になると考えられる。

この手の不条理な怪談に関しては、現代では中山市郎・木原浩勝共著の『新耳袋』シリーズや、黒木あるじ『無惨百物語』シリーズ、朱雀門出『脳釘怪談』等に該当する怪談が数多く収録されている。

[作品解説8 渡辺温「父を失う話」]

- ・散りばめられる「不条理」
- ・段階的な「父」の喪失

【9：怪談と童話】

怪談と童話というのは、一見接点が無い様に見える物の、ある程度リンクしていると考えられる事のある物である。童話というのは、ある意味で二重の視点から読まれる物である。即ちその一方は子どもの視点であり、もう一方は大人の視点である。子どもの視点に立って読んだ場合と大人の視点で読んだ場合に内容は同じである物の、与えられる意味合いと

いうのが全く違う様に感じられる訳であり、童話の場合しばしば大人の視点で立った場合に、異界の物語としての恐ろしさ又は美しさが、そして同時に残酷さの様な物が際立つ物語となっている場合が多い。それは、子どもの理解力においては見落とされがちな様々な暗喩的な物に大人の方が反応し、其処から様々な感情が引き出される故であろう。あるいは子どもの規律においてはさして異常とも思われない物が、大人の規律から見れば異常な、または残酷な物語として映り、それ故に恐怖が掻き立てられるのかも知れない。

怪談と童話について考える場合、見落としてはならない作家は今回挙げる宮沢賢治と小川未明が居ると考えられる。宮沢の場合も小川の場合もどちらも多くの場合、最初は現世的な世界観が描かれる物の、気付けばそれが境界を越えて異界的な世界へと誘われて行く場合もあれば、元から異界的な設定となっている場合もある。特に宮沢については後述するので此処では省くが、小川の場合は童話でありながら非常に陰惨であり怪奇幻想的な設定をも辞さない創作態度が伺え、それが一層大人の視点に立った読者に対して恐怖を喚起する事になる物と考える事が出来る。

また、現代においても童話や絵本に関して恐怖を追求する動きが出て来ているのは非常に興味深い事実である。例えば、京極夏彦（作）／町田尚子（絵）『いるのいないの』や、皆川博子（作）／宇野亜喜良（絵）『マイマイとナイナイ』、宮部みゆき（作）／吉田尚令（イラスト）『悪い本』等がこれに該当する。

#### 【作品解説9 宮沢賢治「ひかりの素足」】

・宮沢賢治における四類型

・残酷性の中の美

#### 【10：怪談と古典】

現代の怪談を考える際に、古典的な書物について考える事は非常に重要な事である。例えば有名どころで言えば、『源氏物語』における六条御息所の怨霊、『今昔物語』に現れる様々な化け物達、更に遡って『古事記』における黄泉の国の物語等もその視野に入ってくる。此処で間違っはならないのは、当時の人々がこれを現代の我々が認知している様に怪談として読んでいた訳では決して無い、という点である。基本的に、日本において恐ろしい話が怪談として享受される様になるのは、江戸期の百物語の開催やそれに類する書物が出版される時期である。逆に言えば、それ以前に恐怖を怪談という言葉ば娯楽として享受する、という考え方は余り無かったと考えるべきであろう（一部の夜伽衆の様な人々が語った内容に恐ろしげな物語が含まれていたりしたのかもしれないが、それでも人口にその様な物語が娯楽として膾炙していたとは思われない）。

しかしながら、その上でも作家はその様な文脈を離れて古典的な書物の中の幻想的な部分、怪奇的部分を上手く取り出し現代風に調理する事によって、新たな恐怖の可能性を追求する訳である。折口信夫の『死者の書』が平安的な世界を、小松左京「黄色い泉」が『古事記』の神話の世界を、そして現代においては勝山海百合『竜岩石とただならぬ娘』が志怪小説的な世界を元にして物語を形作っているのは、やはり古典との関わり、古典との対話から生まれ出ていると考える事が出来る。

【作品解説 10 世阿彌／野上豊一郎編訳「松風」】

・夢幻能という型式

・「幻妖」との接点

【終わりに：怪談の現在】

やや心もとない解説が続いて恐縮であるが、これで一応怪談概論と銘打っての解説は終わりである。

これまでに見て来たのは、主に怪談の分類や理論、怪談の主要な（と担当者が考える）テーマ、怪談形成における基盤的なジャンルとしての古典、という物であった。この様な理論やテーマ設定がどれ程有効であるかは判らない。少なくとも、担当者としても出来るだけ最新の怪談の状況を考えた上でテーマを考え、取り上げたとは思っているが、それもまた数年後にはどうなっているかは全く判らない。もしかすると、怪談というジャンル自体が完全に廃れてしまっているかも知れないし、また全く新しい怪談の定義を与える様な作品が世に問われている可能性もある（個人的には前者の様な状態になるのは寂しい気もするのだが）。

未来の話をしてもしキリが無いので、此処では最後に現代の怪談の状況について大雑把ながら概説をしたいと思う。

日本における怪談の世界は、正しく海外との接触によって発展して来た。それは中国の志怪小説の場合もあれば、遠くヨーロッパの国々の幻想的な物語達との出会いによる場合もあった。また、他にも現在は重視されているとは言い難いが、イスラム諸国の伝承、アフリカにおける伝説、東南アジアの民俗伝承といった物との接触も十分に議題に乗せられるべきであるし、また開拓もされて行くべきであろう。

さて、明治時代には森鷗外や芥川龍之介と言った面々が翻訳という形で様々な西洋の幻想小説・怪奇小説を日本へと紹介し、その蓄積を助けた。その流れが江戸川乱歩や更に進んで中井英夫、澁澤龍彦、平井呈一、荒俣宏、紀田純一郎、そして現代における倉坂鬼一郎、南條竹則、風間賢二、東雅夫といった人々（『幻想文学』世代とでも言うべき人々である）によって受け継がれ、今尚新しい物語が海外から翻訳され、紹介されて来ている訳である。また、国内においては三遊亭円朝が怪談噺を開拓し、泉鏡花、太宰治、夏目漱石、三島由紀夫、小川未明、室生犀星、吉屋信子他様々な作家が、或いは海外の知見を取り入れ、また或いは日本の民俗的な素地を背景にして、更には自身の体験談としての怪談を描き出し、昭和に入っても皆川博子、赤江瀑、星新一、安部公房、小松左京といった面々がその様な怪談的な作品を描き続け、平成に入ってもその流れが留まる事は無く、怪談実話の物語に円城塔が参戦し、ファンタジー的な幻想を引っさげて恒川光太郎がホラー大賞を受賞し、稀有の天才である乙一（もとい山白朝子）が縦横無尽に幻想の原野を駆け巡り、日本で唯一の怪談専門雑誌である『幽』が刊行されるという様な状態が現出している訳である。怪談的な作品は今や、ジャンルを超えて様々な人々はその技量を遺憾なく発揮する領域へと裾野を広げているかの様に思われる。また、国内の古典的な怪談作品の見直しも平成に入ってからではなされており、『山田野理夫 東北怪談全集』や『昭和の怪談ヴィンテージコレクション』、『大正の怪談ヴィンテージコレクション』等がこれにあたるだろう。過去との対話という観点からも好ましい状況である。また、怪談分野は3. 11の東日本



大震災を経験する事で、大きく変化をした事も書いておかねばならないだろう。その最たる物が「怪談とは鎮魂である」（実際にはもっと複雑な理論である）という議論によって、失った土地のアイデンティティを死者の記憶について語る怪談によって取り戻そうとする動きである「ふるさと怪談トークライブ」だと考えられる。この様な東日本大震災に対する怪談側の動きに関しては、今後注視をしつつ評価を慎重に下して行く事になるだろう。また、怪談の世界は星新一の例でもわかる通り、掌編、ショートショートの世界へも大きく展開しており、『てのひら怪談』がその好例である。また、個人的にはミステリ作家の描く怪談という観点も忘れてはならない物であると考ええる。

こう言い続けていてもそれこそキリが無いので、概説まがいの文章もこれで終わりにするが、斯様に怪談とは範囲が広く、「怪談とは何か」という問いは、最早問いとしての意味をなさないと感じられる様な段階にまで来ている。しかしながら其中で、怪談の新たな側面を開拓して行く動きは今後も止みそうに無く、また、怪談というジャンルが未だに展開可能な可能性を秘めたジャンルである事も確かな事実である事、それを確認して文章の末尾としたい。

#### 【作品解説 1 1 中島敦「文字禍」】

・怪談と海外

・言霊の存在

#### 【参考文献 1：作品・作品集】

以下では、広大な怪談・幻想小説・怪奇小説の世界及びそれに関連するジャンルの作品群を掻い摘んで海外・国内入り乱れて紹介して行きたい。此処に挙げてあるのは、完全に担当者の恣意的な選択であり、基礎的な文献でも取り上げられていない物は多々ある。この参考文献を一つの手がかりとして、怪談・幻想小説・怪奇小説への旅を始める、或いは続けて頂ければ幸いである。

- ・有栖川有栖『赤い月、廃駅の上に』『幻坂』
- ・綾辻行人『眼球綺譚』『深泥丘奇談』『深泥丘奇談・続』
- ・黒史郎『夜は一緒に散歩しよ』
- ・勝山海百合『竜岩石とただならぬ娘』『十七歳の湯夫人（マダムタン）』
- ・長島楨子『遊郭（さと）の話』『パリの舌人形』
- ・岩井志摩子『ぼっけえ、きょうてえ』
- ・宮部みゆき『あやし』『おそろし』『泣き童子』
- ・皆川博子『結ぶ』
- ・田辺青蛙『あめだま 青蛙モノノケ語り』
- ・京極夏彦『幽談』『冥談』『眩談』
- ・浅田次郎『あやしうらめしあなかなし』
- ・東雅夫編『文豪怪談傑作選』シリーズ（全18巻）・『世界幻想文学大全』（全3巻）・『日本幻想文学大全』（全3巻）『おばけずき 鏡花怪異小品集』『百聞百物語』『わたしは幽霊を見た』『幻妖の匣 1 赤江瀑名作選』

- ・小島水青『鳥のうた、魚のうた』
- ・岡部えつ『枯骨の恋』
- ・神狛しず『京都怪談 おじゃみ』
- ・森山東『お見世出し』『祇園怪談』
- ・恩田陸『私の家では何も起こらない』
- ・井上雅彦編『異形コレクション』シリーズ
- ・雀野日名子『あちん』
- ・『怪談実話系』シリーズ
- ・稲川淳二『稲川淳二のすごーく怖い話』シリーズ
- ・木原浩勝・中山市郎『新耳袋』シリーズ
- ・福澤徹三『怪談実話 黒い百物語 叫び』『忌談』『忌談2』
- ・平山夢明『顛（こめかみ）草紙』シリーズ
- ・『怪談実話コンテスト傑作選』シリーズ
- ・『女達の怪談百物語』
- ・『男達の怪談百物語』
- ・安曇潤平『赤いヤッケの男 - 山の霊異記』『黒い遭難碑 山の霊異記』『ヒュッテは夜啗う 山の霊異記』
- ・小野不由美『鬼談百景』『残穢』
- ・『怪奇小説傑作選』シリーズ（全5巻）
- ・アガサ・クリスティ『死の獵犬』
- ・クリスチアナ・ブランド『領主館の花嫁達』
- ・メイ・シンクレア『胸の火は消えず』
- ・『怪談実話コロシウム』
- ・押切蓮介『暗い廊下と後ろの玄関』
- ・法条遥『バイロケーション』
- ・三津田信三『赫眼』『ついてくるもの』
- ・『日本怪奇小説傑作集』（全3巻）
- ・『古事記』
- ・『日本書紀』
- ・『今昔物語』
- ・千室『搜神記』
- ・蒲松齡『聊齋志異』
- ・紀昀『閱微草堂筆記』
- ・須永朝彦著及び編訳『江戸奇談怪談集』『就眠儀式』
- ・南条竹則編訳『怪談の悦び』『地獄 英国怪談中篇傑作集』
- ・筒井康隆編集『異形の白昼』
- ・遠藤徹『姉飼』
- ・恒川光太郎『夜市』『金色機械』
- ・風間賢二編『ヴィクトリア朝妖精物語』『天使と悪魔の物語』
- ・荒俣宏編『魔法のお店』
- ・西崎憲編訳『怪奇小説日和——黄金時代傑作選』
- ・松岡光治編訳『ヴィクトリア朝幽霊物語』
- ・石塚則子・大沼由布・金谷益道・下楠昌哉・藤井光編訳『クリス・ボルディック選 ゴ

シック短篇小説集』

- ・平井呈一『真夜中の檻』
- ・片山廣子『新編 燈火節』
- ・ウィリアム・バトラー・イェイツ『ケルトの薄明』
- ・澁澤龍彦『澁澤龍彦綺譚集』（全二巻）
- ・中井英夫『トランプ譚』

【参考文献2：評論・その他】

此处では、怪談・幻想小説・怪奇小説の世界をより深く知るにあたって道標となるであろう評論・その他の著作を海外・国内入り乱れて紹介している。此方も担当者が恣意的に選んだ物であり、基礎的な研究でも抜けている物が多々あると思われる。あくまでも一つの参考として（一部には同志社大学の教授陣も連なっている）適宜これらの書物を参照して頂ければ幸いである。

- ・東雅夫『遠野物語と怪談の時代』『怪談文芸ハンドブックー愉しく読む、書く、蒐める』『百物語の怪談史』『なぜ怪談は百年ごとに流行るのか』『文学の極意は怪談である』
- ・南條竹則『怪奇三昧 英国恐怖小説の世界』
- ・風間賢二『ホラー小説大全』
- ・東雅夫・下楠昌哉責任編集『『幻想と怪奇の英文学』
- ・紀田純一郎『幻想と怪奇の時代』『乱歩彷徨 なぜ読み継がれるのか』
- ・エリック・S・ラブキン『幻想と文学』
- ・ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』
- ・富士川義之・結城英雄『亡霊のイギリス文学——豊穡なる空間』
- ・坂本光『英国ゴシック小説の系譜——『フランケンシュタイン』からワイルドまで』
- ・杉山洋子・神崎ゆかり他『ゴシック小説を読む——ウォルポールからホッグまで』
- ・マリーマルヴィー・ロバーツ『ゴシック入門——123の視点』
- ・小谷真理『ファンタジーの冒険』
- ・石堂藍『ファンタジー・ブックガイド』
- ・荒俣宏『別世界通信』
- ・アーシュラ・K・ルグウィン『夜の世界——ファンタジー・SF論』
- ・田中勲儀編『泉鏡花『高野聖』作品論集』
- ・小泉八雲『さまよえる魂のうた』
- ・日夏耿之介『サバト恠異帖』
- ・由良君美『椿説泰西浪漫派文学談義』
- ・小池滋『ディケンズ 19世紀信号手』
- ・マルセル・シュネゲール『フランス幻想文学史』
- ・須永朝彦『日本幻想文学史』
- ・下楠昌哉『妖精のアイランド——「取り替え子」の文学史』
- ・中井英夫『ケンタウロスの嘆き』
- ・澁澤龍彦『快樂図書館』